江戸名所圖會

History of
Tokio.

都名所圖會始出適在余成童時一閲之即謂此可以供卧游矣則江戸亦不可無是輯也後數歲聞諸西山大久保翁有齋藤幸雄者有採勝之癖方撰江戸名所圖會採擇稍遍描寫顛

盡然獨病江戸稱名所者僅僅不足僂指也余謂凡名所之稱本出於咏歌者流盖其設法謹嚴盡一縱令有山秀水麗足以吟咏而其不為古歌所取者不得稱之名所是其所以雖世有

汙隆要不失為雅馴也然名者實也實者主也主豈可以實加損焉哉翔秋里氏之撰非惟所謂名所而已神祠佛寺詭係恠誕藂陌綺街事渉猥瑣者無網羅而不遺乎翔復江戸之為地

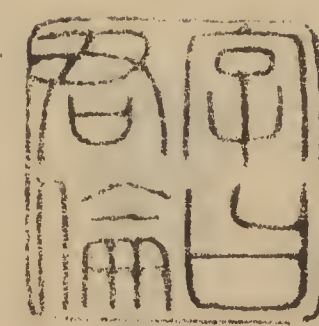
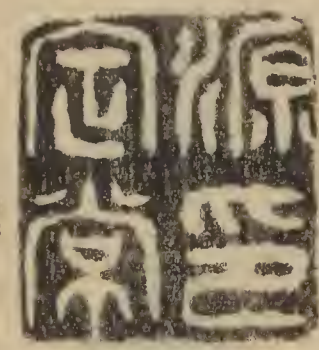
武野之曠秩類之峻溼泝之永
玉川之澄絡繹邦域霞關思嵒
之宜春真土菴崎之宜烁衿帶
郊坰其勝殆不讓上國乎是亦
何病之有翁頷而是之既而韋
雄没翁点尋逝終不知其咸否

然而秋里氏所著拾遺與味河
泉攝及一二諸州名所圖會者
陸續上梓盛行於世余於是乎
悵然恨韋雄之輯懲期失時而
又聞其男韋孝善追其志再接
三索蒐聚滋廣猶未公於世幸

孝亦以文化戊寅沒又遺托之
男幸成泣受之匪勉不怠
校讐極力竟竣其功間者幸成
寔然抵門通刺出其金帙示之
且需序言是蓋由余往日介人
促其成也余乃一閲三歎追念

與酉山翁言三紀於茲喜悲交
集又憾幸雄幸孝與酉山翁皆
不覩其完成矣然其所以歴年
若此其久者敬慎遺托不敢輕
擧則死者而有知必曰予子若
孫相續能成吾志矣抑畜會之

撰圖供臥游亦以充童觀非所以專示大方若夫覽者尤其不雅馴則可謂不知類矣余更為作者分跡其由云天保三年閏月冠山松平定常撰

河三亥書

海内地名著於古人和歌者宗祇澄月之徒攬而輯之稱之名所山川之險易風俗之淵源名物之同異可坐而識也吾江戸名所顯於古人和歌而晦於當今者不少矣多麿川調布著於延喜式霞関載於武蔵風土記堀兼井筆於紀貫

之僧西行之歌皆名所之顯於古
而今失其蹤者也及考古之士過
而訪之林壑再啓其閟焉泉石
每擅其奇焉然無勝情者則不
能也齋藤幸雄有勝情矣有
勝具矣江戶勝區名蹤蕪於榛
叢荒墟之間而不可識者搜絕
谷披窮林或訪之古老或徵之
斷碑文自史傳地誌諸家所
和歌紀行之書以及稗說野乘
苟足以資考鏡者尤博採
總括闡發於湮淪不可問之蹟
焉其名所則著之繪事收山河
於尺幅驅萬象於筆端亦可

以當卧遊矣。於是百年湮晦之
蹤迹。英雄百戰之故處。名士美女
之芳躅。燦然而復炫其前。所
謂物以人自見待人以彰者驗
矣。未及就業。遽罹疾而逝。識者
惜之。嗣子韋孝克纘先緒。補之
未備。余先人與韋孝締交已久。

矣。嘗約為之序。而韋孝亦不永。
亦繼而捐館。嗟夫韋孝胡為所稟
於性者厚。而所享於年者獨殊。
不勝痛惋也。及今余能承遺識
以一人而任二世之編纂。卷帙既繁
採擷亦博。而補輯悉富。契勘必
當。始克成斯浩瀚之編。而得聿脩

為人遊者無憾矣。乃走承微序於
余。可否。余先人易簀蓋八稔矣。而余
以薄技浪代先人之任。太方之誚
固所不免也。　天保癸巳春三月
江戸　龜田長梓謹識
牧野信之

ゆるか旅のさてかとのかゝやきしつゝ勤るとなきさきにありあつかし月
のうち里ゆくふつらてくハ山路また海あせてくかたりゆくるかたのふよふ
こゝろにあらぬハそれあかれらん東をよりてハ大きなるさる紀
はるかにまゐ旅やれとそれ大塊のうへより見まいはこひとは九牛の
毛ひとつはとおよそすとのいひなん法のくせくひにかの人の記し
あるへきにされともむかしより名はきこえぬるどこらんくて旅
おのつからこゝろえなりゆきあるハ世のりはつきてく田ぶる深さを
我なり新をかなしまゐる市人のもとみのことしうはらひきなるまて
なれしてあまたの世を経てくの後よハ西へ名をなりハふかなかう
読れるとのつゝあらぬかはむきにかなりてきぬるまてこゝのち
はしれいつゝぬることと國にはかきへ時くしかくこう有人あるへきされ

つひにたえはてぬべくなりしをその子董孝うけ
つぎてくはしく伝へ来しのこゝろをもあきらめてんとこそ誰させ给ふなれ
とのつるそのまゝ絶えにし後のよりおとしめられしこそ本意
おこなはれうちたる一事をとらしめひきさるを本所なる京のわ
くありなる番場で一衣をも源寺海旅上人をしてかへし
ありおほしかりけるより世中におもひたちかれく此方の清くいたし給
よきにかんをとめしことものかれれるまゝにかくそへし給を衣に志もたく
とてあるをひとのぞ志あるるの常に勤めるなるらしおこなへるつゐてに
この二年あまりをたちなり給ひてのすむでらのあるかたを要しう得れ
従ひてよせあひあきらかにみえくることしく人の見とれあらんかくる一異
なんおちゐるあまたれかうらなれんは見えるとのをさおほえて

いとあはれに月ごろちぎりおきしにあらずやとなげくひとの家あく
その人とらんとすることもあらばかへしいの事てんとおもひやる
みちのひまてかさる人とおほかたもあるまじなくよむ人へ
にあふときはかゝることをおもひまちく諸人やあるかなひあ
たせなきことまでよろづ孫生ねとなりなば伝にかくは
おもへとかひなしこのくはなりまなこゝろはくしかるまじのあき
からく思ひかれそは伝へおのゝ志ありくあるくなんとぞ
ひしあやうにこゝろひく我をとしころの我にのなひかありいと
うましさらはかなしみやりてんとの人をよろつぞれいさしく世給
ひてよきにかなしこれより出されさるをやつてこゝろのしかしてゆ
きらく宮には志うくのあまたあまたまうでいて湯あらし

神代にはくにのさかひ大和路より
おしてる浪速のうらはにかよひ
淀みもとどまらずおほくの京
かくあしびきの山のしるべに五きれに
海くるまをこえ伊勢の栗には旅風の
伊勢の国東路のみやこうつされ

うまやくも湊かくなれくはなしに
旅をつれたものらしをしたがふ
にのひかりの旅衣にて旅の坂をこえぬ
人にたまさかにいさといふ富に
またみ人のうやもて心をいとなれる
月日にかくいとど遊びしくあると

なとおりにぬれつゝ世をぬらしさ
おはしますかさねて色を心におこし給
ちぬるもくにはげともゝに思ひけら
ぬるにもとも河のふ雲にすゞしき
さぬこひに歌人の法のかゝるこさまは
恭乃寺のはのうちにありける

の井殿のこゝろもちよりすゑの祢
めでたき隅田河の流かゝれにもおなし
こと昔とたとりたるは盲師のうたに
しもさらにたゝしとそかへし
このあはれを武蔵のおもて座でき
おはしましけるをみかくしなき

すみそとの京屋によく
哀れせきとらにて茶の湯の代に
心の隔てもなく語に加へある十ばかり書
のこりはなくてふたつのまめをかさねつ
其るを文倣つりてもとて十まりに二三とせと
以ふむし　松濤軒長秋しるす

凡例

凡此編の次序ハ、大城を以て首とし、餘ハ南方に囬環する
迄北斗七星の位に配當して、都て七巻を以て全部とす
凡江戸の地ハ廣大繁壯にして、名流高士の芳蹟ハ蔚然と
して史冊を照曜し、琳宮梵刹ハ林の如く聯りて悉く擧へ
擧るに遑あらし。故にその中にも由緒いちしるきを撰て録し、或ハ傳説
亡ひて證とすべきなきハ、土人の口碑に存するものを取て證
とし、或ハ無根の浮説にして言妖妄に渉るものハ、是を省く
然りと雖、人口に膾炙して傳称のたしかなるハ、今姑ちに添削
評隲を加ふるに能ハずして、姑くその儘を載す。大伽藍と雖も
來歴事實を亡失して詳ならざる事は、且小祠叢祠の類
新建勧請のものハ、悉くこれを闕きて、好古博物の士に訪ひ
他日後輯の成るに及ひて附載せんと欲するのみ

凡方位を示すには前位に循ひて其の東西南北に在りと標し又左右といふはその地にむかひとする儘の左右と云覧るものゝ志まゝを推て標準とせよ

凡引用の書は全文を載せずして其の綱要のみを撮て主意を摘めるものは紙員増多にして覧るもの厭倦の心を生せんを恐るゝが故なり次に神社佛刹に傳ふる所の佛像宝器書畫諸什器の類神奇附會に渉りて其實を徴すべからざるは社司寺僧の言ひ傳ふる所に任せて記す又武蔵風土記の残編は備はるありと雖も古来より世に傳へたる書なれば粗く是を用ひその取捨においては覧る人の意にまかするのみ

凡神社佛閣の略貞方域を圖するは當今のありさま形勢を模写し且地景の間に四時遊観の形勢を繪かに其態度風俗服飾容儀までも當今の形容を写し旧地に基て画するものは各時を分てり是土地の風光を開きして他邦の人として東都盛大の繁栄なることを知らしめ且童蒙の観覧に備ふることなからしめんか為なり

凡此地名所の中武蔵野隅田川二所を以て第一の勝槩とす故に隅田川を以て東岸に分ちて六七の二巻に配せり西岸には芙蓉の白峰雲間に聳へ東岸には筑波の翠鬟暁霞に藏して山水の風致備はり縦観の美此地に停まるか依て東岸の全勢を眸中に收んと欲せは此両巻を對照して其全局を知るべし

凡真間の舊跡は下総の地にして武蔵にあらずといへども纔に利根川を隔つるのみにして実に萬葉集以降の芳蹟なり且文人墨客吟筵を展ひて游筇を曳くものは必其風光を賞して第一の壮観とす故に此に於て鎌倉志の例に倣ひて倂せ記して此地の内に收む覧るもの志まゝを諒せよ

附言

此書ハ祖父か寛政中に編をして父縣麻呂か刪補文化の末に至て
なほ又文政の今にいたりて上梓の功を終へぬ凡年序を経ること三十有余年
江都蕃昌に随て神社寺院境地沿革するもの頗多し一向の小祠も
須臾に壮麗なる大社となり纔の草庵も巍然たる荘厳となれる
ものも少からね或ハ祝融の災に罹りて楼門回廊を焼失し礎石のミ
存するの類其廃枚挙すへからず然りといへども時々是を改るに遑あらね
なれハ今時の形に差へるもの多し見るものいぶかることなかれ

齋藤月岑識

江戸名所図会巻之一

天樞之部目録

水道橋 駒込吉祥寺旧地
昌平橋 三崎稲荷祠
蘆深川 顔焼 薬師 淡路坂 太田姫稲荷祠
稲荷河岸
柳橋 薬研堀
歌舞妓芝居
新大橋
根津権現御旅所旧地
兜塚
天満宮
伊雑太神宮
新川大神宮
恵比須稲荷社

於玉ケ池 於玉稲荷
馬喰町馬場
両国橋
堺町 葺屋町 中村座 市村座 操座
三派 別れの淵
中橋
永田馬場山王御旅所の図
俳仙其角翁宅地
三ツ橋
新川酒問屋図
湊稲荷社

駿河台
神田川
辯慶橋 東錦絵店
清水如水宅地
吉原町旧地 大門通
江戸橋 河岸 木更津
天王御旅所 南伝馬町 同御祭礼
霊巌島 霊巌橋
永代橋
鉄炮洲

筋違橋 八ツ小路
丹後殿前
柳原封疆 柳森稲荷
浅草橋
杉森稲荷社
加茂真淵翁閑居地
四日市 土手蔵
鎧の渡 鎧の淵
茅場町薬師堂
徂徠先生居宅地
随見屋敷
薬師堂橋本稲荷社
半井卜養翁居宅地

了然禅尼庵室地
江風山月楼
采女原 采女井
新橋
三縁山増上寺 本堂 三門
極楽橋 宗廟 大門
円山松 丸山
加年堂 柵門
涅槃門
日比谷稲荷祠
真福寺
金地院 閻魔 石像
西久保八幡宮
赤羽川
御穂神社

佃島 同白魚網
咳嗽爺嫗
木挽町 歌舞妓芝居
汐留橋
経堂 安国殿 開山堂
御影 念仏堂 五重塔
芙蓉洲 弁才天祠 性秀院
御成門
烏森稲荷社
愛宕山権現社
天徳寺
飯倉
赤羽橋
麻島神社

住吉明神社
寒橋
織田有楽斎第宅地
尾張町 呉服店
飯倉神明宮
涅槃石 飯倉天満宮 子聖社
藪小路
愛宕山正月三日 祭事之図
城山
熊野権現宮
心光院 布引観世音 竹女故事
毘沙門堂 日観堂

鎧島
西本願寺
熊野祠 曼荼羅石 芝天神宮 千代稲荷祠
円光大師旧跡
宇田川橋
桜川
青松寺 万年山
太田道灌城跡
勝手ケ原
芝浦
西応寺

三田　綱坂 釣引坂 狗繋松　産湯水 綱塚　小山神明宮
春日明神社　月波楼　三田八幡宮　聖坂
功運寺　濟海寺　竹芝寺舊址 同古事
亀塚　徂徠先生墓　魚藍観音堂　汐見坂
伊皿子薬師堂　牛小屋　高輪大木戸　七月廿六夜待之景
高輪ヶ原　泉岳寺　如来寺 所説思
稲荷祠　常光寺　寶蔵寺 子安観音 弁才天　太子堂庚申堂
高山稲荷社　東禅寺 育森寺 八幡宮　谷山　釈神社

武蔵　東海道に屬す和名類聚抄曰牟佐之國府多磨郡に在と云く
武蔵國上古ハ東山道の内に入る光仁天皇の宝亀二年辛亥冬十月己卯大政官奏して東海道に屬せしむるよし續日本紀にみえたり
橘樹　荏原　豊島　足立　新座　入間　高麗　比企　横見　埼玉　大里　男衾
幡羅　榛澤　那珂　兒玉　賀美　秩父　葛飾　等以上二十二郡あり　拾芥抄に六縣東海
那珂等の三郡を加へ葛飾を除て廿四郡とすれも詳ならず貞享三年丙寅三月利根川の
西を割て武蔵國に属せしむ昔ハ本所葛西の辺浅草の川を國界として川より東の地ハ
一圓に下総國なりしを右に云ごとく今ハ葛飾郡の半を割て利根川の以西を武蔵の國に
葛飾郡とし以東を下総の國の葛飾郡とし和名抄に武蔵國管二十一とありて葛飾郡なし
今是を加へて二十二郡とせり和名抄葛飾を加止志加と訓も同書に多磨も多波と訓じたり
古事記牟邪志に作る舊事記胸刺に作る　萬葉集に牟射志に作る　同くむさしと称せ
其義ハ風土記抄にいふ武蔵の國秩父の嵩ハその勢ひ勇者の怒り立るが
ごとし日本武尊此山に東夷征伐の祈願をこめたまひその後東夷盡く平治
せしかハその武器を秩父岩倉山に納めたまふよりてこの國をむさしと称せし
なり其後　称徳天皇の神護景雲二年武蔵の國より白雉を献じければ公
卿の奏せし言に武武崇文の祥ありといふよりて此國を武蔵の字を以て嘉名とはなせしと
續日本紀称徳紀云神護景雲二年六月癸巳云云武蔵國橘樹郡人飛鳥部吉志五百國於

日本武尊東夷征伐の時武具を秩父岩倉山に收め玉ふ是武藏國号の濫觴なり
倭健戎容猛
征西又伐東
腰間十束劒
草薙偃威風
春齋子

同國久良郡獲白雉献焉即下郡郷議之奏云雉者斯良臣一心忠貞之應白色乃聖朝重光照臨之符國号武蔵既呈武崇文祥とあるハくらやしく牟邪志の三字を好字に改め二字に定め武蔵と書て志の文字を畧られしより此白雉の瑞につきて武蔵の二字を祝して奏しる詞より今の名にかなへるとあり

東照宮様當國に大城をさため鴻業の基を開きたまひしより

四海竟に干戈の労を忘れ万民長に太平の化に浴まゐらす乃是

天意の志らしむる所にして國の號も自ら昇平の御代に應しるなるへし

家集　物名むさし

梓弓せむさして殺よわしそ引の山の遠ミそてあとハとゝめつ　柿本人丸

江戸　豊嶋郡峡田領にして其封境往古ハ廣くわたりしるに似たり

白石先生の説に江戸ハ庄の名なるへし云云按に中古庄と唱へしハ郷のうちを合せし名なるへし郷里共に佐登と訓せ令義解云凡五十戸為里と云く然る時ハ佐ハ狭登ハ処の畧にして廣大なるの意に武蔵國風土記に荏土に作る傳云洲地ハ大江に臨とりしへ云るなるへし

故に江戸と称せりとのふ　甲陽軍鑑に江戸の辺をも中武蔵と唱へたるとあり義経記に云く江戸太郎重長ハ八箇國の大福長者とあり

ある時ハ江戸の地ハ其頃まてく重長領せしなるへし南向亭以平川一水を隔て今の三の丸の地ハ江戸の郷日輪寺の方ハ神田郷なりところに平川と云ハ今の飯田町の下よりつく入堀の水脈是なりと　狐の説の余とし又同し説に今の御城の迎ひ江戸と云へし此あたり　摂州大坂御城内の雁木坂の旧名を大坂と号く後世

御城の号に呼れしより彼地の惣名となる江戸の名も此類なるへしと云云　寛永二十年板桜のあつまめくりといふ冊子に御つへいふと白露の葉末にむすふ浅草を打越ゆけてほとゝゆかくむさしの江戸につきたりとあるも上の意にてひとしまてのかの封域今のことに廣大なるをまへし　天正已降江戸を以て

御居城の地となし玉ふ故に日を重ね月を追ひ益繁昌におよひ

今ハ経緯拾里にあまりて都て江戸と称せり萬國列侯の藩

邸市鄽商賈の家屋鱗差して縦横四衢に充満し万戸

千門甍を連ねたり実に海陸の大都會にして扶桑第一の名境といふへし

江戸大城基立　人皇百三代後花園帝御宇鎌倉の官領上杉修理

太夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道灌（持資の傳ハ第五巻稲付静勝寺の条下に詳なり）當國荏原郡品川の館にありし時勝地をえらひて豊嶋郡江戸の地に城営を開むとし康正二年丙子経始し長禄元年丁丑功成て道灌ここに移り住む（江戸名所記等の説に父資清入道道真築くとありといへとも左衛門太夫持資相継て居城とすといへとも詳ならす鎌倉大草紙に長禄元年四月上杉修理太夫持朝入道武州河越の城を取立らる太田備中入道ハ岩付の城を取立同左衛門太夫ハ江戸の城を取立らるるとあり是を證とすへし又或書云千代田宝田祝の里といふ所をひらく城地とするとそ又一説に千代田寿田宝田等の三

江戸東南の市街より内海を望む圖
上総
安房
本牧

氏をして武州江戸河越岩付等に城塁を築かしむとありて一かくれ或ハ地名とも武八人名也とす大道寺友山翁云天正より以来ハ千代田城と申るると云々其昔持資城中に燕所の室をたてゝ軒の南を静勝と号し東を泊船と呼び西を含雪と号し千頃灌の搜に應ろく万里居士江戸城に入山水の美を眺望し窓含西嶺千秋雪門繋東呉萬里船とらへ古人の詩を引て大に称揚せり 然に文明十八年丙午持資讒害せらる 此地の美景ハ江亭記の文中に詳なり

もし後ハ定政の手に属を依執行なりける 武藏志料 曾我兵庫丞の子同豊後守をして此城を守らしむ 不執叓 鎌倉大草紙に文明九年江戸の城に上杉刑部少輔朝昌三浦助義同千葉次郎自胤等を篭置とあり按に其頃長尾景春武州にありて兵を催し太田道灌と戦ふにより鎌倉にありし定政江戸の城にハ是等の人を居置しなるべし 其後定政の子同五郎朝良同修理太夫朝興共に相續て此城によりしが大永四年甲申正月十三日北条左京太夫氏綱がために攻落され朝興大に敗走して河越の城に移る是より後ハ氏綱家人冨永神四郎 小田原記 四郎左衛門 遠山四郎左衛門 小田原記 四郎兵衛 某等を城代としてこゝに篭置氏康氏政氏直に至る迄すべて四代の間北条家に属す 是間遠山冨永両家かわり代々鎮を衛護す 諸城受遞録に遠山丹波守直景城代たり 然に永禄の始遠山丹波守冨永三郎左衛門両人北總國府臺に戦死して天正の頃ハ北条治部少輔遠山左衛門尉景政城代として其弟河村兵部少輔同弾正遠山丹波守籠城し猶城を守る 天正十八年庚寅秋七月十二日其家没落せし

より已来永く御當家の御居城と定させられ同年八月朔日江戸の大城へ台駕を移させたまふ其頃迄ハ僅なかりの城営なりしに慶長年間御城廓の地を廣めさせたまひ唯今のごとく巍々然として萬世不易の大城とハなさせられける

江亭記

寄題江戸城靜勝軒詩序

武州江戸城者太田左金吾道灌源公所肇築也自關以東與公差肩者鮮矣固一世之雄也威愛相兼風流藉甚比來騷亂以來欽兼王命者八州三州之安危係于武之一州武之安危係于公之一城可謂二十四郡唯一人夫城之爲地海陸之饒舟車之會他州異郡蔑以加焉壘之高十餘丈懸崖峭立固以繚垣者數十里許外有巨溝浚塹咸徹泉脉潴以鄰碧架巨材爲之橋以爲出入之備而鐵其門石其墻磴其徑左盤右紆聿升其壘公之軒峙其中閣踞其後直舍聶其側戍樓保障庫便廐廠之屬爲屋者若于西望則逾原野而雪嶺界天如三萬丈白玉屏風者東視則阻墟落而瀛海蘸天如三萬頃碧瑠璃田者南嚮則浩乎原野寛舒廣衍平蕪茵布一目千里野與海接海與天連者是皆公几案閒一

氏をして武州江戸河越岩付等に城塁を築かしむとありて一説に或ハ地名とし或ハ人名とかす 大道寺友山翁云天正より以来ハ千代田城とかへるといへり其昔持資城中に燕所の室をつくりて軒の南を静勝と号し東を泊船と呼び西を含雪と号す其頃灌の採に應して万里居士江戸城に入山水の美を眺望し窓含西嶺千秋雪門泊東呉萬里船といふ古人の詩を引て大に称揚せり 此地の美景ハ江亭記の文中に詳なり 然に文明十八年丙午 持資讒害せられし後ハ定政の手に属を依執行なりける 武藏志料 曾我兵庫頭の子同豊後守をして此城を守らしむ 鎌倉大草紙に文明九年江戸の城に上杉刑部少輔朝昌三浦助義同千葉次郎自胤等を篭置とあり按に此頃長尾景春武州にありて兵を催しおりしかば戦ふりよいとありし鎌倉にありし頃江戸の城には是等の人を居置しかるべし

其後定政の子同五郎朝良同修理太夫朝興共に相續て此城にありしか大永四年甲申 正月十三日 北条左京太夫氏綱か為に攻落され朝興大に敗走して河越の城に移る是より後ハ氏綱家人冨永神四郎 小田原記四郎左衛門 政直遠山四郎左衛門 小田原記四郎兵衛 某等を城代としてこゝに篭置氏康氏政氏直に至る迄すべて四代の間北条家に属す 是間遠山冨永両家おり〳〵代々の城を鎭護す 諸城要述録に遠山丹波守直景城代となり然に永禄の始遠山丹波守冨永三郎左衛門両人北總國府臺に戦死して天正の頃ハ北条治部少輔遠山左衛門等城代より同十八年北条家滅亡の頃遠山左衛門佐景政を小田原に篭城し其弟河村兵部少輔隔攻ありて遠山丹波守の家城を守る 天正十八年庚寅秋 七月十一日 其家没落せし

より己来永く
御當家の 御居城と定させられ同年八月朔日江戸の大城へ
台駕を移させ給ふ 其頃迄ハ僅かりの城営なりしを慶長年
間御城廓の地を廣げさせたまひ唯今のめくり巍々然としく萬世
不易の大城とハなさせりける

江亭記
寄題江戸城静勝軒詩序
武州江戸城者太田左金吾道灌源公所肇築也自
關以東與公差肩者鮮矣固一世之雄也威愛相兼
風流藉甚比来驗亂以来欽兼王命者八州内才三
州三州之安危係于武之一州武之安危係于公之
一城可謂二十四郡唯一人夫城之為地海陸之饒
舟車之會他州興郡蔑以加焉壘之高十餘文懸崖
峭立固以綠垣者數十里許外有巨溝浚塹咸徹泉
脉瀞以鄰碧架巨材為之撟以為出入之備而鐵其
門石其墻礎其徑左盤右紆聿升其壘公之軒峙其
中閣踞其後直舎轟其側戍樓保障庫庚廐廠之屬
為屋者若于西望則逾原野而雪嶺界天如三萬丈
白玉屏風者東視則阻墟落而瀛海蘸天如三萬項
碧瑠璃田者南嚮則浩乎原野寛舒廣衍平蕪茵布
一目千里野與海接海與天連者是皆公几綮閒一

元旦諸侯登城之圖
藩邦玉帛此朝宗
關險何須百二重
四海道通合渤澥
中原嶽秀有芙蓉
城地日暖晴雲適
邸第春分淑景從
回望欝葱佳氣裡
車如流水馬如龍
服元喬

物耳以故軒之南名静勝東名泊船西名含雪公息
斯遊斯則一日早午晩之興一年春夏秋之變千態
萬状拍几可韷者雖互出更呈而所以出焉呈焉着
凡三焉東瀛晨霞之絢如南野薫風之颯如西嶺秋
月之皎如着天之所與也遠而漚波曙兮島嶼分鵜
背驃兮闔巒紫近而腴田旁環陂水常足某林可樵
其叢可蕪者地之所獻也城之東畔有河其流曲折
而南入海商旅大小之風帆漁獵来去之夜箐隠見
出没於竹樹烟雲之際到高橋下繋纜閣擢鱗集蛾
合日々戍市則房之米常之茶信之銅越之竹箭相
之旗施騎卒泉之珠犀異香至鹽魚漆臬危筋膠藥
餌之衆無不彙聚區別着々之所頼也於呼不出此
室收天也人以為吾有蹕哉於是乎懼其揺而散正
矣慿其躁而失常矣杜戸䐜目厚養弗已發之於言
則清着成敵詞和者成政化然後乃定其神乃寧其
氣神與氣合而太清為輿元氣為馬道遥於玄々無
窮之域則雖鬼神弗克測其機也矣青牛真人有曰
躁勝寒静勝熱清淨為天下正蕪濤城解之曰成而
不鈌盌而不冲譬如躁之不能静静之不能躁耳夫
躁能勝寒而不能勝熱静能勝熱而不能勝寒皆滯
於一偏而非其正也唯泊然清淨不添於一非成非
鈌非盈非冲而後無所不勝可以為天下正矣今也
公之以所守扁於軒不翅勝熱無所不勝則宇宙間
與公相争而相戰着未之有也所謂可以為天下正
着也其不知為着咸謂公之威愛能俾人竹懼矣如
倉雪泊舩着浣花老人蜀中倦遊之境題扁所及而

以此地同此景摘以為名在公乃吟中一風流尓騒
松村菴翁由幼至老鴻藻片章被於天下其名謳傳
者六十餘年於此矣是以公欲需翁題詩其上者蓋
亦有年矣丙申夏適介人請詩及跋且要屬能言之
二三子題于後書于投掛于室俾闕左人歌之翁告
予曰我未嘗東遊奕以得措一辞幸予所目擊述以
序可也予退[illegible]弗允蓋予之序乗舜也翁之詩與跋
呉昇也遂以所聞見着次而為之序文明八年丙申
秋八月羣玉峯叟蕭菴龍統

傳聞静勝軒中景四面窗扉一々
芥天晴碧海望蓬萊商帆似自平
樹来我老無期泊舩處闗心西嶺
兵鼓聲中樂受降閒若延客日臨
去吹雪士峯晴嶞江
籍々威名闗以東又知天下有英
静驅使江山入數中
江戸城高不可攀我公豪氣甲東
雪收作青油幕下山
雲連雪嶺水連呉城上軒窗閑畫
日碧天低野入平蕪

村菴靈彦
閒野闗青丘吞蒂
蕪過漁又如從遠
成堆堤
雪樵景茝
總風帆多少載詩
黙雲龍澤
雄鼓聲不起邉城
補菴景三
闗三州富士天邉
蕭菴龍統
圖最愛似蜀行地

古今壯遊之士有志於四方者必以經歷關左山東之地為先為凡遊關左者必以見富士山過武藏野渡隅田河登筑波山則皆誇四方觀遊之美也予壯年之時跋而望之然今耆矣遂初志者百不獲一以是為恨頃閒太田左金吾源公者關左之豪英也守武州江户城而有功於國矣蓋武之為州也以用武為名甲兵四十萬應卒如響乃山東之名邦也江户之城於是乎在雄據其要而堅備其壘所以一人當險萬慮不進亦乃武州之名城也別夫此城最鍾勝景寔天下之所稀也聘睨之隙隨也形槃彼有樓館此有臺榭特置一軒扁曰靜勝之軒是為其甲也亭曰泊舩齋曰含雪各其附庸也若其懸軒燕座回簷四面則西北有富士山有武蔵野東南有隅田河有筑波山此乃四方之觀在此一城也而一城之勝又在此一軒也緣是四方有志之士不欲後遠遊俱顧一登此城到此軒者亦其理之當然也而今金吾公託其客之西上者求京師諸人之題詠而將藻飾其軒捐閒之詩拔也得命同題者及予五人然此五人之中東遊躬壓其地者惟統正宗一人而巳故以序屬正宗具陳于前告不知者如往觀為於是就予次求后題不肯拒辭輙用所聞於正宗之說而附子篇未且後傳語金吾公雖予耄矣之後而跋望之志尚在為文明八年龍集丙申八月初吉書予岩栖之村菴

希世靈彥

寄題左金吾源大夫江亭

湘山暮樵得公

士嶺衡天東海瀾
靜中勝景畫中看
一由旬雪梅花鷗
載泊前灣晚照殘

武陵興德

華構臨江天宇低
北帆南揖日斜西
髩端雪白漁竿客
萬頃玻瓈可釣齋

捐陽中景

華館相依主亦賢
江亭茲試武城紘
東溟浸户浪黏地
西嶺當窓雪界天
珠履三千門下客
玉樓十二洞中仙
憑誰說與蘇夫子
赤壁休誇前後篇

河陽東御

士嶺之東湘水北
一亭新架有高城
閒關撲地育民庶
經籍滿床羅俊英
鷗渚鷺汀春晝靜
竹籬茅舍暮光晴
丹青難畫戰圖外
惟幄運籌張氏情

左金吾源大夫江亭記

關左形勝之雄以武為冠武者大國也其山木奇傑而兼要發者江户其武之冠乎距相府連幌可百里為綠燕白沙並海以北玉簪之山羅帶之水跋涉忘勢而不覺日之将晚也翠壁丹崖屹然以高崎珍卉佳木蔚然而中秀迺左金吾公源大夫之所築新城也攀以躋為俯以臨為四面斗絕直下百丈東南佳山水歷々以在杖屨之下南顧則品川之流溶々漾々以涂碧人家鱗差乎北南而白搶紅樓鶴立暈飛以翼然乎其中東武之一都會有揚一益二之亞称

也東望則平川縹緲兮長堤綫迴水石巍偉兮佳氣鬱芬謂之淺草濱白花大士遊化之場巨殿寶坊輪奐以掩映乎數十里瀛補洛妙境神人所幻云其後則滄洲茫乎百川與海會呉楚東南坼乾坤日夜浮即此乎其前則谷岩出沒而原野莽蒼天壑之幾多仍一夫嘗關則百万不可以近世乃知此地面勢實一方金湯之最而無所與二也背周室中微有諸侯惠仲山甫城于東方國人安以集也宣王大與爲公柵於斯外抵敵之喉襟內擄武府之殷背東民賴之公之功可謂與仲山甫顏行者城上置開燕之窒扁曰靜勝靜勝蓋兵家之機齊乎當其西馨而有富七峯之雪天削芙蓉以玉立三萬餘文其窓日今雪北梵南擬則積水緬天泱齊含吐洪朝以出縮于璧夕羣山隔岸雲叢流洗濃翠而隱見于餘晴自然無軸之盡也危背鷗汀漁家民屋枕藉以雜處泳戶水扉人朴地清旅舩之所泊也青龍赤雀舳驢相衙蘭樟桂棄舸經舫緯如織而欸乃之聲無鬮也江情湖思寔槃矣哉締小亭曰泊舸也摘字於院花詩史其人襟宇蒲洒措意於驗雅之域弗語而可以知而巳於是湘中情即以詩鳴其道者或慕觴公之遊韻或歆羨其山水之美以寄詩言志金蘿琳琅其音兮鼉而成章余亦寓鋒々於餘響魚目入珠燕石鑠喋非志也公之求之最也重以紙尾書而見命余朴而野若文何之有邪然督責弗遍轉避熱地辭磐鉀鰈朽以聊且聚記其景象之曼乙而云尔爲文明丙中秋之抑也湘山蕃樵得幺

文明六年六月十七日江戸城にをゐて道灌哥合を興行す これを江戸哥合と呼へり 其人〻はつきのごとし

心敬　資雄　平盛　音誉　道灌　珠阿　孝範

資俊　好継　快兼　卜巖　資常　宗信　瑞泉坊

恵仲　資忠　長治

以上十七人 判者は心敬僧都 講師は平盛なり

孝範家集 二月十三日於聖廟法楽 静勝軒 太田道灌

よく一續まへりしに梅の盛

うそくゝゝき色香もあかぬ梅の香をちらさてつたふ春の山風　孝範

宗長東土産 むさしのくにゝ傳ふる人ありて江戸の館に六七日逗留にて連歌三百韻あり

霜さむき松枝く田鶴乃聲日この都
遠山ゑ浪をへ霞む朝戸ゝ草
雪ゑ今朝ゝ浪にまさるゝそれかな　上杉 建芳

一日つ歸て面白かりし會席なり云々

我庵は松原續き海ちかく婦しの高根を軒端にそ見る　道灌

此和歌ハ太田道灌静勝軒の含雪亭にありて詠しけるとぞ

鳴る出陣又ハ守へ詠進しかるゆへなりし各異見の事ノト
てちかひを忘りし七日ゆるゝきれ軍勢あやぶ
はてきらふ立待りと云く

吹上御庭 旧名を局澤と云 始は四日とある八天文十四年三月なり

按に吹上とハ江河に臨みて高き地をいふなるへし駿州冨士川の辺武州荒川の辺吹上といふ処あり又江戸小石川氷川明神の南の地旧名を吹上といひ小石川の水流の瀬に臨めり相州藤澤の辺武州鴻巣の辺に皆此名あり

松原小路 田安御門の内なり昔此地松原なくありしを結城黄門公御館を建られて木立の御館と呼ぶなるへし

往古太田道灌我庵を松原つゝき海辺くと詠せし和哥によりて名つくるとなり或人云此南に増上寺の御堂ありしとあり依て数寄屋ハ寛永九年の江戸図に今の代官町黒鍬の朝鮮馬場の辺に国師やしきと記してあるを観智国師のやしきを略して云なるへし昔黒本尊も此処に安置してありしなるへし

梅林坂 平川口御門の内にあり文明十年の夏太田持資或日一室にありて午睡の中霊夢を感し翌日菅公親筆の画像を得てこゝに勧請し梅樹数百株を栽依て梅林坂の号ありと云

平川町にある平川天満宮是なり三巻の平河ハ往古上下と唱へ川に 初平川天神の紛下にありむかし 菅神の宮は今糀町にあり

まつ擬くあまし由小田原北条家の古文書にみえたり

赤坂の浄土寺等の寺院昔ハ此地にありしとなり 法恩寺

八代曽河岸 和田倉御門の外北御堀端をいふ天正以前ハ此地波打際にて漁者の住家のみなりしとぞ其後日比谷町と云て肴店多き町屋となりしに慶長の頃ヤンヤウスハチクロンといへる異国人に此地をあたへてそ

名所咄に八重数ニ作る又江戸雀に八連州としるす業一本に弥与三に作る又江戸砂子に耶揚子とも書

とりし事跡合考にハ弥養子に作れり或人云慶長十九年甲寅九月一日阿蘭陀人来る耶揚子虎の子二疋を御営に奉ると云々又一書に耶揚子ハ吉利支丹御制禁の時忠節をなせし蛮人なりとのこと事跡合考に云日比谷町ハ芝口へ遷され肴屋のありし町ハ京橋の新肴町是なり又御城内の町より移りしと云々今八丁堀に日比谷町と云あり是も当地より移りたる町なるへし古俗の唱なり

龍の口 和田倉御門の東御溝の餘水を落す此所辺潮さし入あるをいふ昔此辺を平田村といひしと云同所南の角松平右京兆第宅の内に平田明神の社あり

祭る神詳ならす今ハ稲荷を勧請す又此地其昔ハ蒲生飛騨守氏郷の宅地なりと云伝ふ営中の龍の口虎の門梅林坂竹橋是を合せて龍虎梅竹と称しあへり

八見橋

一石ばしの異名
あり此橋上より
顧望すれば
常盤橋
銭瓶橋
道三橋
呉服橋
日本橋
江戸橋
鍛冶橋
ことごとく見ゆる也
一石橋を加へて
八見ばしと云之
日本橋と江戸橋
の図ハ次に出るを
以てこゝに略く

日比谷御門
呉服橋
一石橋
本町
道三橋
銭瓶橋
常盤橋

道三橋 細川美濃部の北の通より常盤橋の方へ渡る橋なり号とする昔此橋の南に典薬寮の御醫官今大路家の第宅ありしとかや（故に此所を道三河岸といふ 延宝図に内河岸とあり 慶長の頃ハ柳町と云し傾城町なりしとなり 慶長十二年の図に町屋とのみ記してあり）

俗間傳云むかし 大将軍家道三をめさるゝ時に遅く来りけれバ御咎ありし時御堀をめぐる故に其道遠しと申上ければ其後此橋をかけしめ給ふとなり

（江戸名所記に此所に道三河岸南北ともに道三といへる医術の面々本道外科針立の輩すむ 又彦次郎橋といふもありしが後年御堀地武家の住宅となる 大導寺玄蕃とあり）

（翁云道三河岸御入國の頃材木渡世の者軒をならべてありしが後年御郭の中屋しきとなりしかば故に御城の外東の方へ移さる今の本材木町是なりと云く）

銭瓶橋 常盤橋と呉服橋の間にあり 昔初て此橋を架し時銭の入たる瓶を堀得し故号とすと 一説に昔此所にて永楽銭の引替ありし故に銭替橋と唱へしとあり 又江戸總鹿子に云く昔此地にて銭を賣ことの市をなせ毎日に両替せしに後ハ銭賣多くなりこれハ互に渡世の為ならざればとて仲間を定めける依て其頃銭買をしと云けると云云

（江戸鹿子江戸雀等の冊子に銭亀橋に作る 寛永十八年印本そゞろ物語といへる冊子に天正十九年の夏伊勢与市といふもの銭瓶橋の辺に洗湯風呂を一ツ立る風呂銭ハ永楽一銭なりとあるハ銭瓶橋に作りたれども久しとぞ考ふべし）

常盤橋 御本丸の大手より東の方本町への出口にして御門あり 橋の東詰北の方に御高札を建らる 金葉集に色かへぬ松によそへてあづまぢの常盤の橋にかゝる藤波といへる古哥の意を松平の御称号によりまして御代を賀しまゐらせての号なりといへり

（按に此橋の旧名を大橋といひ伝ふるハ誤なり 慶長十二年の江戸繪図に今の御本丸の下乗橋を大橋としてあり 同図に常盤橋をバ浅草口橋とあらせり 依て常盤橋の大橋にあらざる事を知るべし）

一石橋 日本橋より二丁斗西の方同じ川筋にかゝる 此橋の南北に後藤氏両家（金座後藤庄三郎 呉服所後藤縫殿助）の宅ある故に 其昔五斗くといふ秀句にて俗に一石橋と号けしとなり（寛永の江戸繪図にハ後藤橋とありて斗の音トウなり 其頃ハ五斗と云しなるべし）

又此橋上より日本橋 江戸橋 呉服橋 銭瓶橋 道三橋 常盤

日本橋
自是太平無事客
東関行盡幾山川
武江城上慶雲静
日本橋頭人氣煽
翠帯紅衣常絡繹
玉鞍金轡毎駢闐
相如題柱知何意
冨貴従来元在天
山崎闇斎
西河岸
通一丁目

日本橋魚市

橋鍛冶橋等を顧望する所に此一石橋を加へて共に八橋と云

とぞ 此橋の南詰東の方へ行河岸を西河岸町といふ檜木問屋多く住する所に檜木河岸ともいへり又菱垣廻船問屋その外諸方への舟問屋多し

日本橋 南北へ架す長凡二十八間南の橋詰西の方に御高札を建らる欄檻葱宝珠の銘に萬治元年戊戌九月造立と鐫す此橋を日本橋といふハ旭日東海を出るを親見る所に寄て号ると

いへるも 事跡合考に云日本橋のかくれもしハ慶長十七年の法歎とありしく其数へを記せりされど北条五代記永楽銭制禁のことを記せし条下に慶長十一年のとし極月八日武州江戸日本橋に高札を建るとある時ハ慶長十七年より以前なりと知べし 此世ハ江戸の中央ナリして諸方への行程も此所より定めしむ橋上の往来ハ貴となく賎となく絡繹としてく間断なし又橋下を漕つらぬ魚船の出入旦より暮に至る迄数々として囂し

北の橋詰を室町一丁目と号く此町の巽角を尼店といふハ尼崎屋又右衛門拝領の町屋なるゆゑんは略しく其西の横深沢の旅宿多く旅行の具抑へ荷馬の装束をあきなふ店多し小路を品川町裏河岸と号く釘鉄物の店多き所に釘店といふ又東の河岸を船町といふ魚家ありて日毎に市を立る

魚市 船町小田原町安針町等の間悉く鮮魚の肆あり遠近の浦々より海陸のけぢめもなく鱗魚をここに運送して日夜に市を立て甚賑へり

銭金を生くせんもりこの銭　芭蕉

帆をかける鯛のさくらや薫る風　其角

祇園會御旅所 大傳馬町二丁目の乾の角にあり 此所ハすべて両側共に呉服物の問屋のミ住す此街より年々正月十月の十九日の夜ハ鯵鯖の儀として魚の市を立てるものハくさハへらし 其宮所ハ神田明神の地にありて祭神ハ五男三女なり 俗是を八王子と称す 毎歳六月五日本社よりここに神幸ありて同八日帰輿を又小船町を旅所とするものハ同十日に神幸あつて同十三日帰社あり是も宮居を神田明神の社地にありて祭る神ハ奇稲田姫にして是を本御前と称せり何れも旅所に遷幸の間ハ日夜参詣群集して一時の賑ひなり

通町 北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中

駿河町
三井呉服店
不二の山
呉服橋
呉服物品々
室町二丁目
越後屋

本町
薬種店
壹番
貳番
參番
四番
安産膏
白龍香
薬種

大傳馬町
木綿店
長井
丸屋

摴京橋新橋を経て金杉橋の辺迄の惣名にして町幅十間餘あり

浮世小路 室町三丁目の間の東の横小路を云されと其故を志らす 或ハ云畳表浮世卧座商人ありし故にいふとも又ハ風呂屋遊女の居たりしなともいへり

十軒店 本町と石町の間の大通をいふ桃の佳節を待得てハ大裡雛裸人形手道具等は鄽軒端を並へたり端午にハ冑人形菖蒲刀なとの市を立て其賑ひをなし弥生の雛市にまさしからす又年の暮に至れハ春を迎ふる破魔弓手毬破胡板を商ふ共に其市の繁昌言語に述尽すへからす実に大平の美とも云んかし 其余尾張町浅草茅町池の端仲町麹町駒込抔にも雛市あれとも此所の市にハ志かす

時鐘 石町三丁目の小路にあり辻源七といへる者是を役す此鐘初ハ御城内にありしとかや 其余称城の鐘つまふ有て候時を報するもの凡八ヶ所あり所謂浅草寺本所横川町上野芝切通市谷八幡目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺等なり

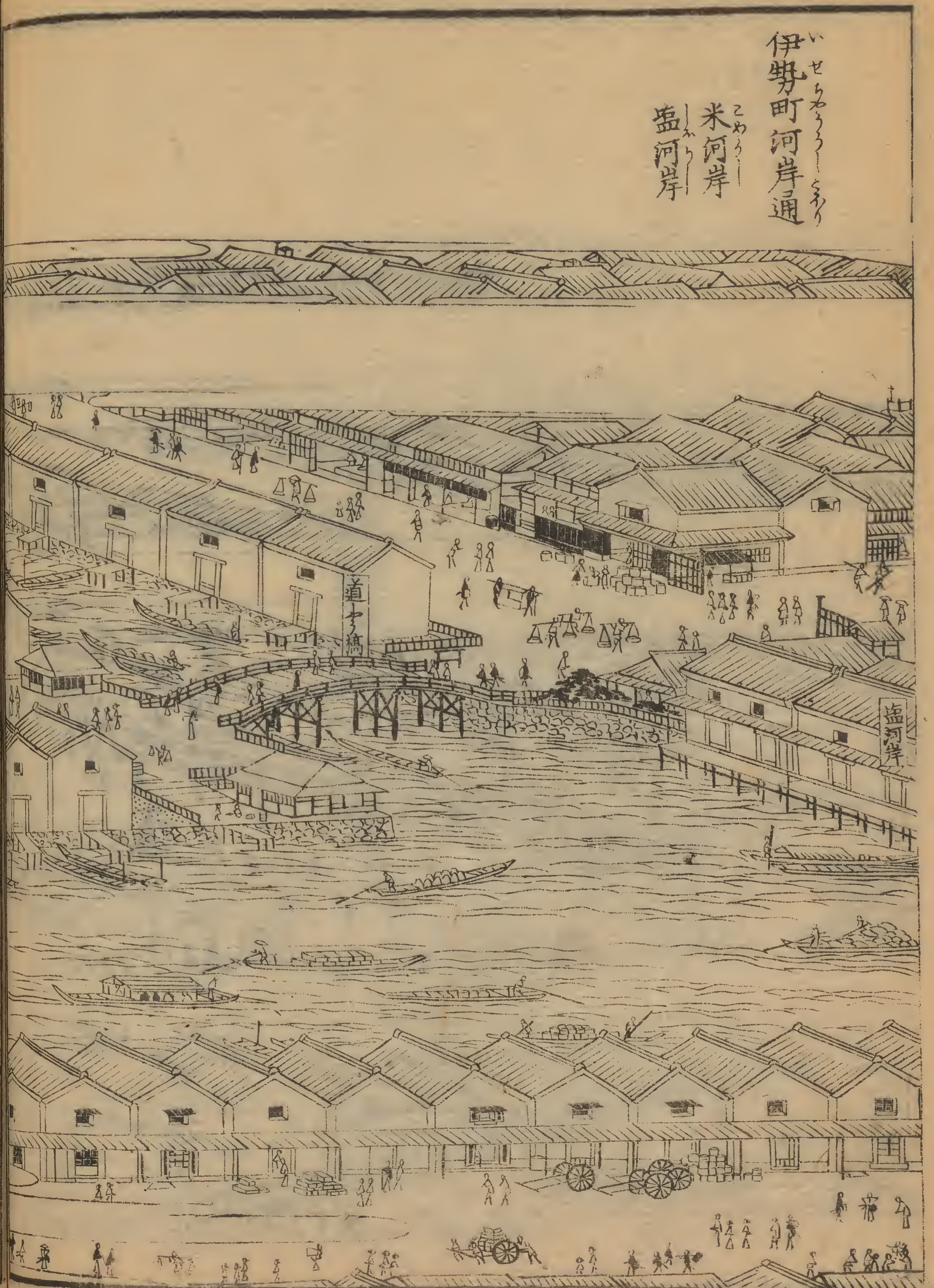
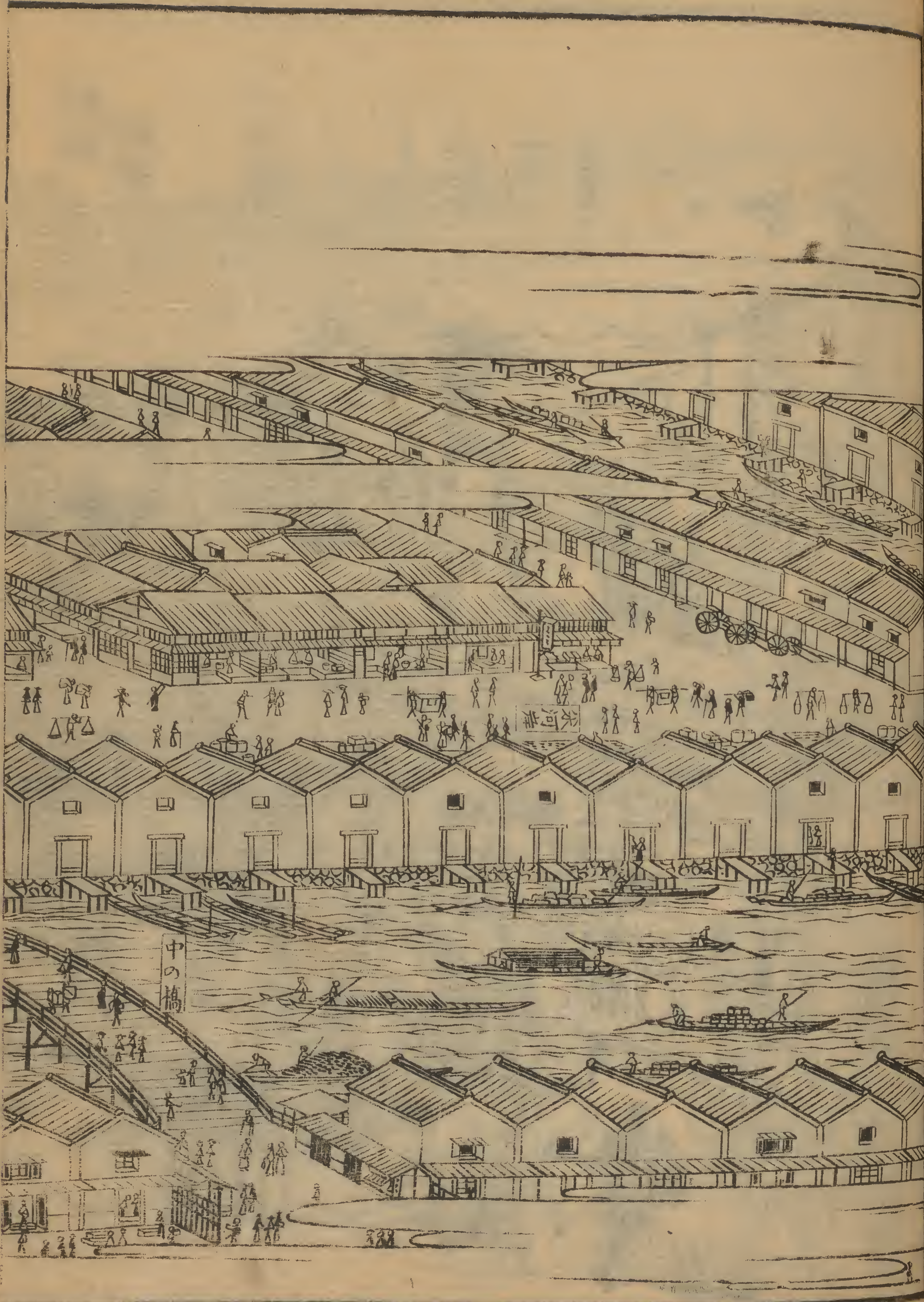
銘曰 宝永辛卯四月中浣鋳物御大工椎名伊豫
藤原重休

小舟町
祇園會
御旅所
五元集
其角
祇園御祭礼
祇園御祭礼
天王御祭禮
天王御祭禮

堀留（ほりとめ）

伊勢町河岸通（いせちやうかしどほり）
米河岸（こめがし）
塩河岸（しほがし）
道浄橋
米河岸
中の橋
塩河岸

十軒店雛市
内裏雛人形天皇の御宇とかや
芭蕉

桜ま宝永七年十二月十九日誓願寺前より出火し石町のあたり焼亡す其頃此鐘も焼たりし故に翌る宝永八年鋳直されしとなり

福田村舊跡 本石町一二町本銀町一二町の辺其舊跡なりと云

傳へ云 大久保主水屋敷内に福田稲荷と称する宮居あり（福田村と號せし頃の鎮守なり今本銀町一町目に白旗稲荷とて三寶院派大寺院のまもる宮ハ別なり）

千代田村舊跡 鉄炮町のあたり昔の千代田村なりといへり（今小傳馬町の裏の小路に）千代田稲荷といへる小社あり相殿に諏訪明神を勧請す此地の里正宮辺某昔忍が岡の麓より宅地を移せしとなり其霊験奇瑞頗る絶しといへり或人云此宮ハ寛正中太田道灌の弟千代田若狭守の勧請なりと故に此名ありとされとも道灌に若狭守といへる同胞あることを考へず又系圖にも此名見えず

本銀町封疆 明暦年間火災を除かしめんが為に是を築しむ（今霊岸島に銀町あり）今ハ同所二丁目三丁目の辺わづかに其形を残せり あるひは塩町と號る町屋あるハ此所のことなり 延宝八年の江戸繪圖に銀町一丁目より大門通りの所迄石垣の土手をきづきて松の並木を畫り 紫の一本といへる冊子に一本松や六本松白銀町の八丁ばかりを土手と云

今川橋 本銀町の大通より元乗物町へ渡橋を云此堀を神田堀と號く元禄四年辛未堀割らるゝとぞ 今須此地の里正を今川某と云ふれハ直に橋の號に呼なると云今此橋詰の左右に陶器鄽あり

又此北詰の西の河岸を主水河岸と字を御菓子司大久保主水の宅ある故にかく云り宅前に井あり主水井と云 昔ハ御茶の水をもめさせられしとなり（再校江府名跡志に大久保主水が亭ハ寛永の頃一石橋の北の橋詰にあり又半井卜養に一首仕る 大猷院御船）まく彼地を通らせ給ふ頃主水の宅を問せ給ひしに へさる由仰ありけれハト養とりあへず 大橋を通らぬさきも通れかし 御茶を呑よりせんとやと申上けるとなり 但その家の傳ふる處にあらざれバ志るし侍り

神田明神舊地 神田橋の内一橋御館の中にありて御手洗あとも今猶存せりとなり 昔此辺旧名を芝崎村と云（小田原北条家の古文書に太田大膳亮所領の中に江戸芝崎一跡と云名を注せり） 閏年九月十五日祭礼の時ハ神輿を爰に渡しまゐらせ奉幣の式あり 其昔ハ浅草の日輪寺を芝崎道場といひしも此地にありしなり 又神田と號るよしハ傳へ云往古諸國伊勢大神宮へ新稲を奉る為に國中に稲を植る地ありしを是を神田或ハ神田御田と唱へしとなり 此地ハ當國の神田なりし故大巳貴命ハ五穀の神なれハとて爰に斎ひて神田明神と號けまつりしとぞ

神田橋 大手より神田への出口に架せ御門あり昔此地に土井大炊

今川橋
此辺瀬戸物屋多し

侯の第宅ありし故に又大炊殿橋とも号けるとなり 事跡合考に云く昔ハ神田橋の外に茅商人あまた住す今の八丁堀の茅場町是なり又其後茅所ありしを遷さるゝ今御和の茅場町となれハこの名なりと云く 此御門北外の町をすべて神田と号く

護持院舊地 神田橋と一橋との間御溝の外の芝生を云 此所もと大塚護持院の舊址なり 元禄年間柳原の南にありし知足院を引て護持院と号られ殿堂御建立ありしか享保回禄の後大塚の地へ移され後明地となる 林泉の形残りて頗る佳景なり夏秋の間ハ是を開かせられ都下の人こゝに遊ふ事をゆるさる冬春の間ハ時として大将軍家こゝに御遊猟あり故に此所を新駒か原とも唱ふるとなり世俗ハ護持院の原と呼へり

飄か淵 元飯田町の東の入堀をいふ 蟋蟀橋と云ハ同所北の方の小溝に架せる石橋の号なり又小川町より九段坂へ向ふ所の橋を今魚板橋と唱ふ又俎橋に作る されと其所以をしらす江戸名勝志に此川を飯田川と云とあらせり 世継稲荷ハ飯田町の中坂にあり文安の頃より此地に

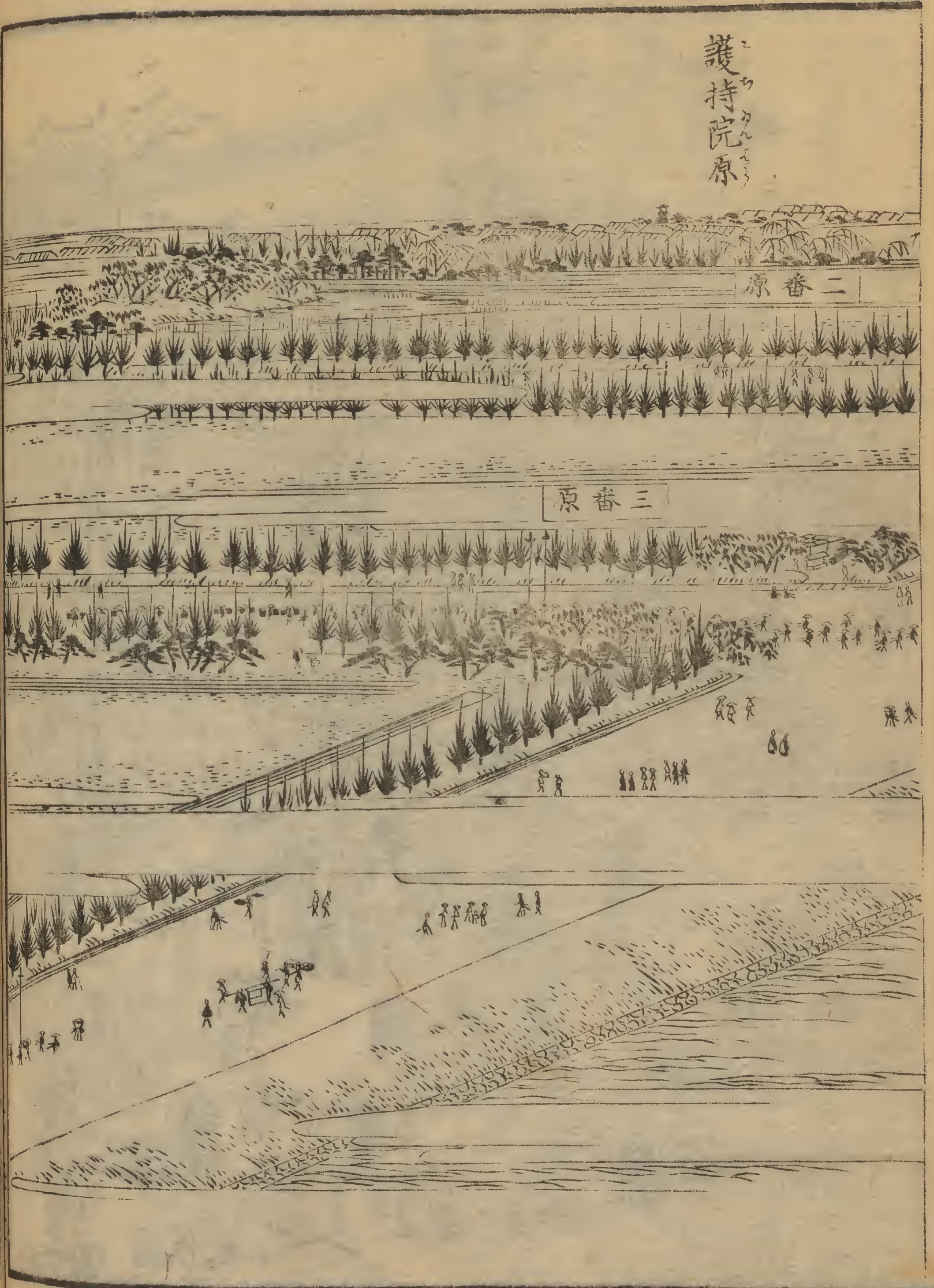
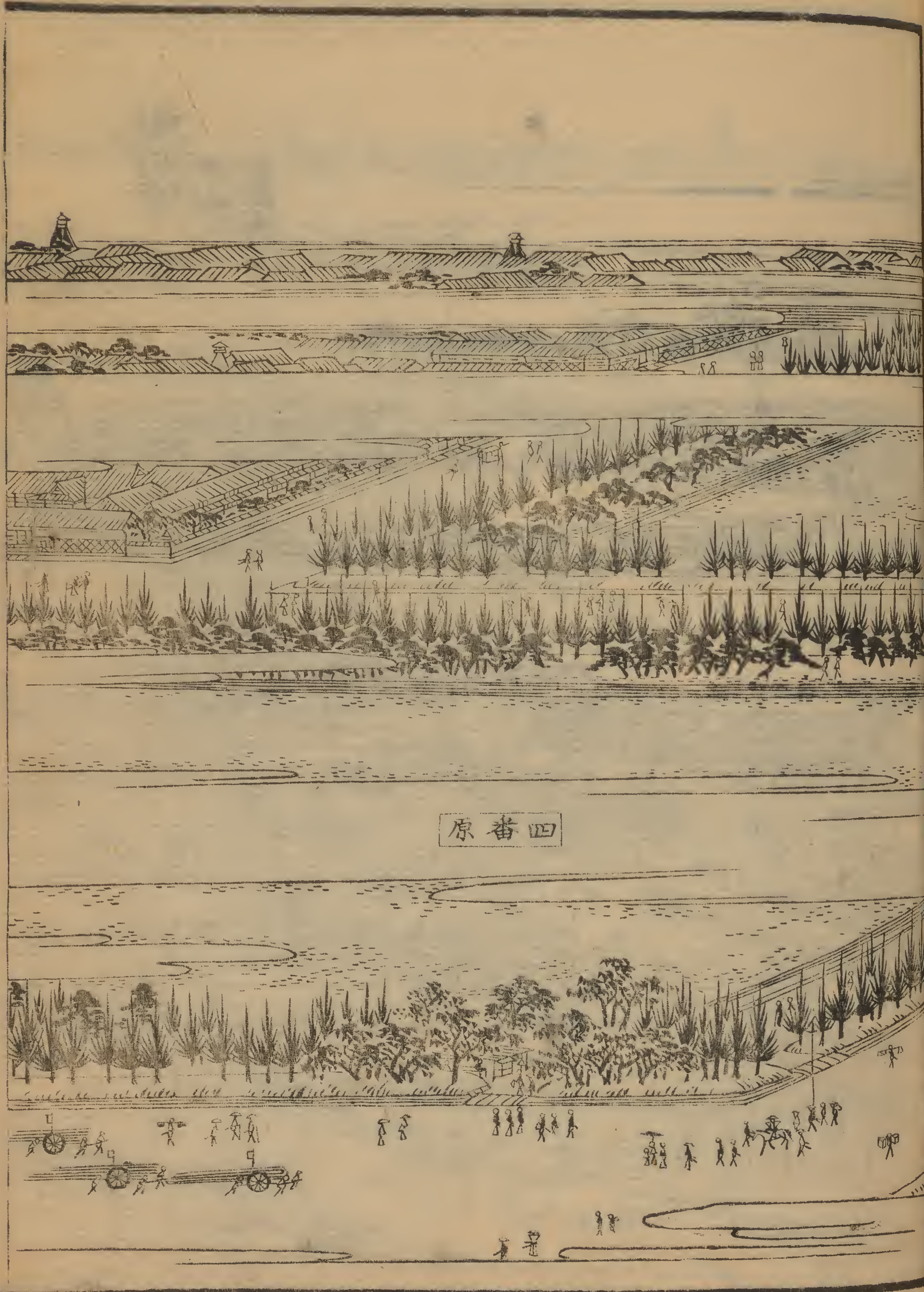
鎮座ありしと云伝ふ南向亭云く天正の始めまで御廓の結構出来さる先ハ雉子橋の外北の方牧木坂の下まで入江ありく其頃ハ市谷長圓寺谷より大沼ありて今の揚場町昔ハ船河原と云其船河原の辺迄もの沼水流れとく此入堀の所へ續きしとそ又小石川根木俣橋の下の水流も三崎稲荷の辺より小川町を経て一橋より少し東南へよりて流るると云按ずるに小川二筋迄流るる地なれバ後世小川町の号起るなるべし今松平讃岐侯の南の方の小溝の石橋を袖摺橋と唱へけるも小石川の水流の旧跡なりといへり

関東古戦録　太田道灌江戸城にありし頃眺望の和歌とて
むさしのゝ小川の清水絶ずして岸の根芹をあらひこそすれ

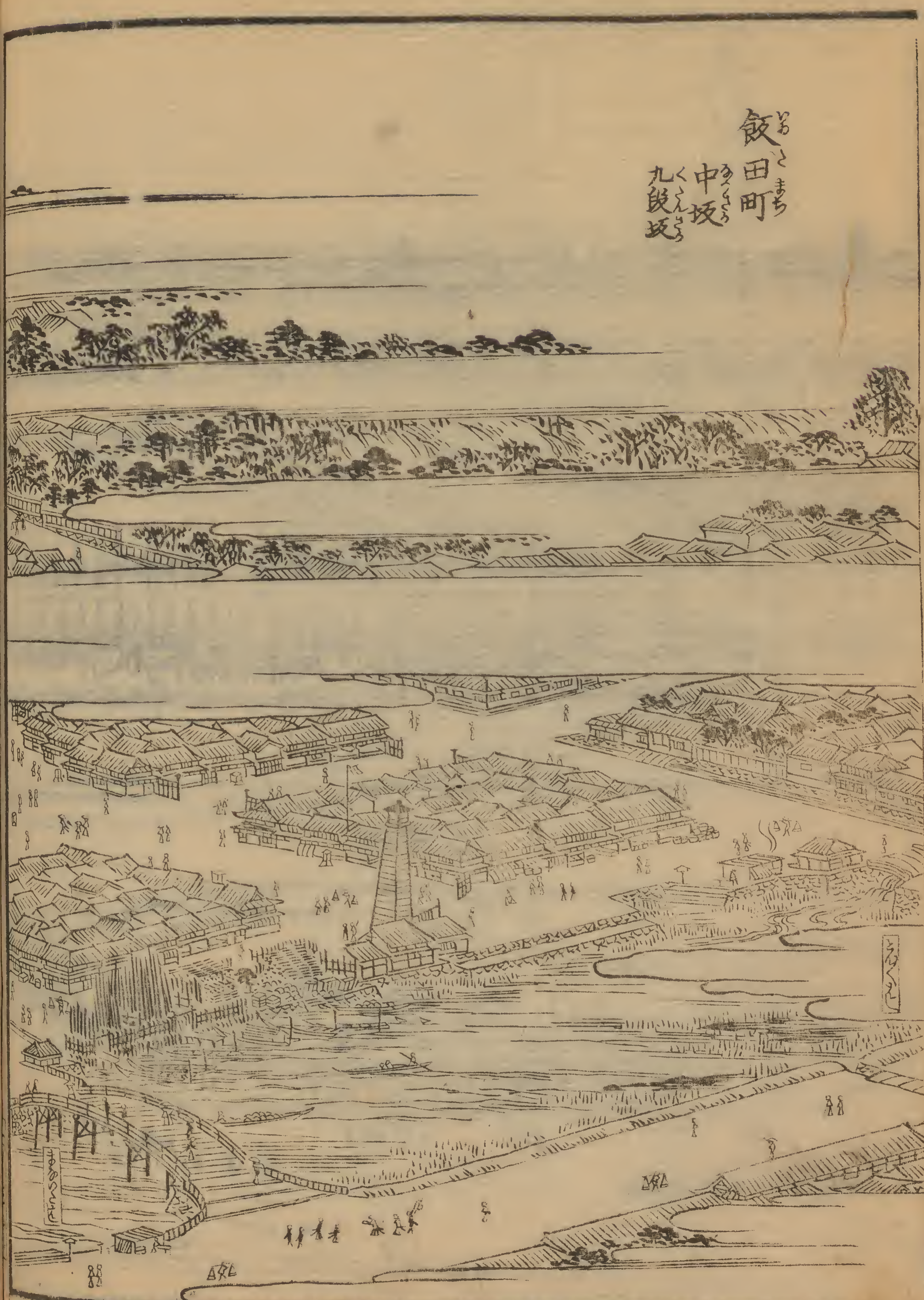
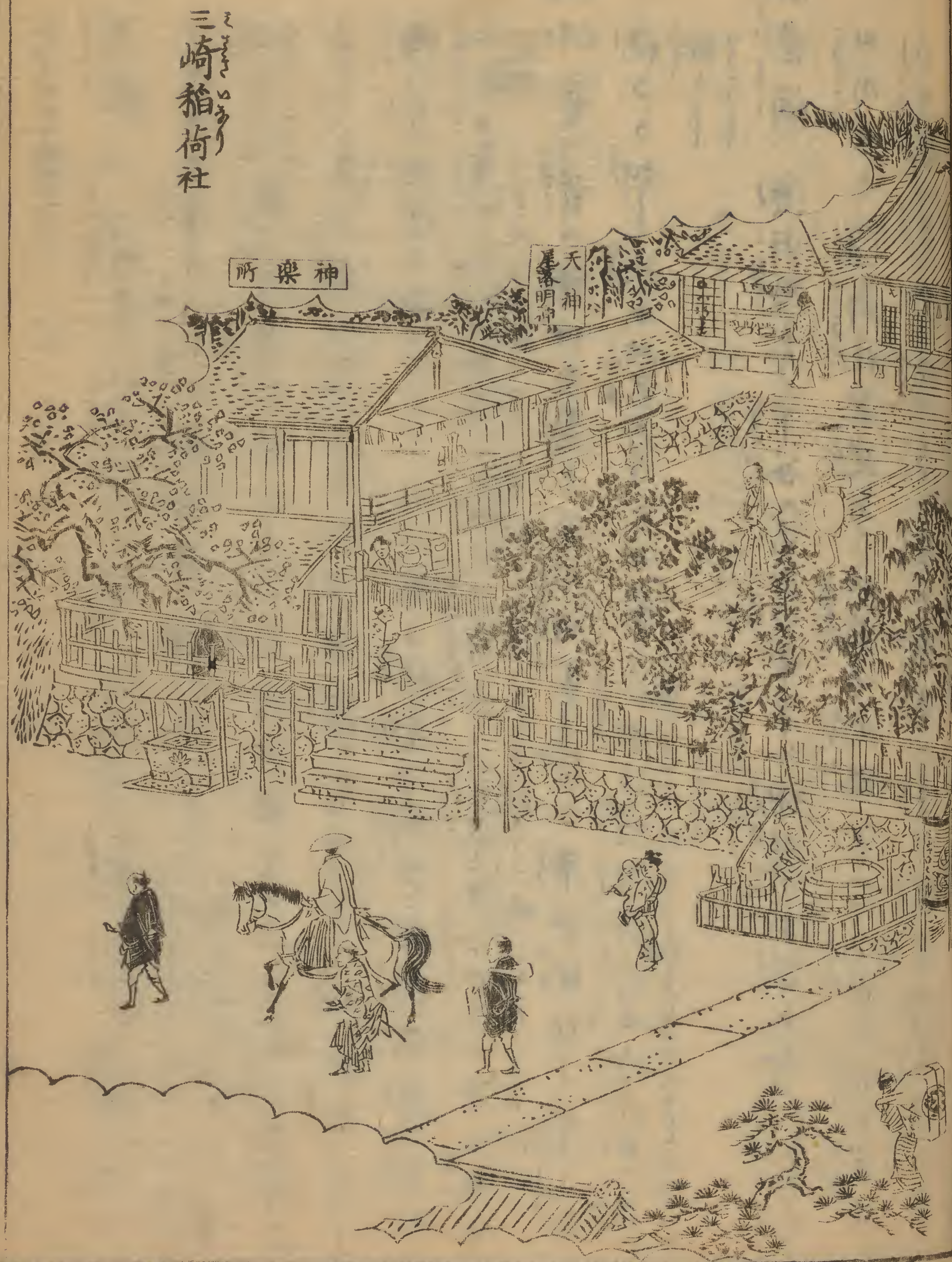
按に此詠風調ともに後世のものにして道灌の作とするに堪ずといへども忍びかくて挙く其小川の清水と号るものハ小川町内藤大和侯の庭中に存しく神田が淵とも云又菊岡沾凉の説なり江戸名勝志に云く神田が淵ハ内藤大和守やしきの内にありこれを小川の清水と云なり即神田明神の御手洗と云く又按ずるにのちの神田明神中古の旧地をしるべきなれバ其地ハ松平備前侯の中やしきなり彼是混雑せしなるべし

田安の臺　元飯田町九段坂の上田安御門の辺をいふ東南の方を斜に見下して佳景の地なり此所に築土明神の舊地あり牛込御門の内米倉家の所なる此構の前に大榎一株あり昔の神木なりと云伝ふ築土明神昔ハ此地にありて田安明神と称し

鎌倉町
豊島屋酒店
白酒を
商ふ図
例年二月の末鎌倉町
豊島屋の酒店に
於て雛祭の白酒
を商ふ是を求ん
とて遠近の輩
黎明より
肆前に市を
なして
賑へり
酒醤油相休申候
入口

護持院原
二番原
三番原
四番原

飯田町（いひだまち）
中坂（なかさか）
九段坂（くだんさか）
中坂
九段坂

御茶の水
水道橋
神田上水懸樋

三崎稲荷社
神楽所
天神
本社

なるとなり

水道橋　小川町より小石川への出口神田川の流に架を此橋の少し下の方に神田上水の懸樋あり故に号とす（此下の川ハ万治の頃仙臺侯鈞命を奉して堀割らるゝ和ありといふ）萬治の頃迄駒込の吉祥寺此地にあり其表門の通りにありしとて此橋の舊名を吉祥寺橋ともいへり三崎稲荷ハ同し西の方土堤に傍てあり此社ある故南の街を稲荷小路と号く（社記云當社ハ上古の勧請にて年代不詳近くハ天文七年小田原北条氏綱れ造營ありと又云此地ハ昔三崎村といひたるとそ因て三崎いなりとも称す）

駿河臺　昔ハ神田の臺と云此所より富士峯を望むに掌上に視るか如し故に此名ありといへり（一説に昔駿府御城御在番の衆に賜りし地なる故に号とすといふ）證とし〳〵

筋違橋　須田町より下谷への出口にして神田川に架を御門ありて此所にて御高札を建らる此前の大路を八ツ小路の辻と字す昌平橋ハ是より西の方に並ひ湯島の地に聖堂御造營ありしより魯の昌平郷に比して号けられしとなり初ハ相生橋あるひハ芋洗橋とも号るよしいへり太田姫稲荷の祠ハ此地淡路坂の上にあり旧名を一口稲荷と称す（社記并拾遺名所圖會に詳なり）又東に柳森稲荷社あり（並に拾遺にこれを載も）

神田川　江戸川の下流にして湯島聖堂の下を東へ流大川に入明暦より万治の頃に至て仙臺侯台命を奉し湯島の臺を堀割小石川の水を初てこゝに落さるゝと云傳ふるもの少しく誤るに似たり古老の説に慶長年間駿河臺の地闢けし時に至て水府公の藩邸の前の堀を浅草川へ堀つけられ其土を以て土堤を築き内外の隔となしあふと云此説是なるへきに似たり（按に昔ハ舟の通路もなかりしを仙臺侯命をうけたまはりし頃堀廣け今のごとく舟の通路を開かれしにあるへし）

丹後殿前　雉子町の北の通りをいふ昔此地に堀丹後守殿の第宅ありし故に是を唱へたるとそ（寛永九年の江戸繪圖に因て考ふるに今此津田山州侯の地則堀家のやしきの跡なり）

筋違八ツ小路
駿河臺
昌平坂

其頃此辺の風呂屋に湯女を置て客を招しゟより又六法組とて武夫にもあらぬ壮年の侠夫大小立髪の異風なる出立にて此風呂屋の辺を徘徊せしかハ是を丹前六法風と呼ひ（丹前ハ丹後殿前の略語なり）後に奇舞妓之を今も此地に清水屋梶川抔云湯屋あり則昔の湯女風呂ゆしくハ其頃ハ清水風呂堀ヶ風呂と称へられしとなり居なく狂言に取組名も丹前とよひけるとなり（所謂六法ちらしハ神祇組 鶺鴒組 白柄組 鉄棒組 唐犬組 荒離組等なり）

藍染川

神田鍛冶町の通を横ぎりて東の方へ流て溝あり里諺に一町ほども上にて南北の水落合此所にて會流する故に逢初と云の儀にとるといふ云又紺屋町の辺を流るゝ故に藍染川と云とも云り（此溝の端鍛冶町の裏の小路に銀善院といへる真言の庵室あり本尊を頬焼薬師と字す此本尊昔千葉家の常衛の侍女に代りて自ら頬を焦しあふといひつたへせり）

於玉ヶ池

舊名を櫻ヶ池と云今神田松枝町人家の後園に於玉稲荷と称する小祠あり里諺に云於玉ヶ靈を鎮ると其傍に

於玉ヶ池の古事

弁慶橋

涸しく井のごとき形残れり昔の池の余波なりといへり往古ハ大なる
池なりしが江戸の繁昌にしたがひ里老傳云昔此地ハ奥州への通
漸くに湮滅してかくのごとくなり
路にて櫻樹あまた侍りける所にありし池なれバ世俗に櫻が池とよべり
また其傍の櫻樹のもとに玉といへる女出居して往来の人に茶を
すゝむ容色たぐひなかりけれハ心なき旅人さへ掛想せぬハ
なかりきとかや中頃人がらも品形も拙からぬ男二人ともに
彼女に心を通ハせけるされハ切なる方にと思へどもいづれも捨がたく
まよひもあつかひけれハ我身のうへを思ひわづらひて女ハ終に
此池に身を投てむなしくなりぬさながら津の國の求塚の古
ことに似たりといへどもあはれなる事ハ同じく里民打寄て亡骸を池の
辺に埋みしるしとて柳を植て記念の柳と号けると云
其舊址明暦の回録に亡びぬるとぞ今ハ名のみを
存せりこの所に好事が池とも呼なハせりとなん
辨慶橋 同所東の方和泉橋の通藍染川の下流に架す其始

柳原堤
やなぎはらつゝみ
楊柳隄春望
楊柳隄邊楊柳春
十枝交影拂紅塵
請看裊々金絲色
總映青雲馬上人
高維馨

此大工棟梁辨慶小左衛門といへる人の工夫によりて懸初しと
いへり此地の形に應じ衢を横切て筋啻にかゝる尤奇なり

柳原封疆 筋違橋より浅草橋へ續く其間長凡十町斗あり
享保年間此所の堤に悉く柳を栽させらる 寛永十一年の江戸繪圖
堤の外ハ神田川なり又此堤の下に柳森稲荷と称する叢祠あり

故に此地を稲荷河岸と呼へり 昔ハ神田川の隈も廣く此川の南北とも柳多く茂りて柳原とのひし處原ありしとなり

馬場 馬喰町三丁目の西北の裏通にあり江戸馬場の中最古し
慶長五年関ヶ原 御陣の時御馬揃ありし所なりと云傳ふ
御馬工郎高木源兵衛是を預りまゐる 此地を馬喰町と云ふ昔ハ冨田半七と高木源兵衛と両人
なりしとそ寛永廿年開板のあつまめくりと云る草紙に木ハ馬喰町とらや侍あまたうち
つとくうちにくり毛の馬もありあるひハ月毛鹿毛ぶちの皆せめうとうありくとく云く又頭ハ
追廻しとのひく左のごとき形なりしとなり 寛永明暦延宝等の江戸繪圖にもみえたり

浅草橋 神田川の下流浅草御門の入口に架す此所にも御高札を建

馬喰町馬場
鶴岡放生會職人哥合
博労恋
あへなくも世の
人ふるまれの
あくがれ
つけずまひこそ
よしなかりけれ
良基
浅艸御門

錦繪
江戸の名産にして
他邦に比類なし
中にも極彩色殊
本問屋

薬研堀
不動
金毘羅
歓喜天

らる馬喰町より浅草への出口にして千住への官道なり此東の大川口にかゝるを柳橋と号く柳原堤の末にあるゆゑ名とするとぞ此所ハ諸方への貸船あり

両國橋 浅草川の末吉川町と本所元町の間に架す長九十六間橋の前後并橋上に番屋を居て是を守らしむ 萬治二年己亥 官府より始て是を造る或ハ三橋會記云寛文元年辛丑新に両國橋を架しめらる依て普請奉行芝山平内両氏に命せられしと云く舊名を大橋と号く事跡合考に万治二年東の大川筋に始て大橋一ヶ所をかけらるゝとあるも此橋のことなり又むさしあふみといへる草紙にも此橋を大橋とあらしてあり事跡合考に云此橋の形ハ扇を開きたるがごとくなると云く其昔此川を國界とせしより両國橋の号ありといへるを今ハぬく利根川を以界と定めたりより後ハ本所の地も同しく武蔵國に属すといへども橋の号ハ唱へ来るに任せて其侭改らずとなり或人云く貞享三年丙寅春三月利根川の西を割て武蔵國に属せしめらると云く此地の納涼ハ五月廿八日に始り八月廿八日に終る常に賑ハしといへども就中夏月の間ハ尤盛なり陸にハ観場所せき計なり其招牌の幟ハ風に飄り扁翻とし両岸の飛楼高閣ハ大江に臨み茶亭の床几ハ水辺に立